

三民主義青年団の創設とその活動

—「反共抗日」青年運動の軌跡—

菊池一隆

キーワード…中国国民党、抗日戦争、中国反共集団
はじめに

一九三一年から四五年当時の中国国内政治状況を分析する際、従来、蒋介石・国民党、中国共産党（以下、中共と略称）、第三勢力（民主派）、軍閥、秘密結社などの研究がおこなわれてきた。だが、それだけでは不十分であり、国民党史研究も十分とはいえない。日本では、これまで看過されてきたが、国民党内派閥でも特異な位置にある特務、民族派、反共集団の研究は不可欠であろう。それらを含めた全構造の中で日本の侵略下の中国の政治状況をビビッドに解明できる。

その研究の一環として、ここでとり上げるのは三民主義青年団（以下、原則として三青团と略称）である。中国国民党の青年組織の形成は遅く、一九三七年盧溝橋事件（七・七事変）の勃発後であった。一九二〇年前後から三〇年代の抗戦前、中国共産党（以下、中共と

略称）の共産主義青年団（CY）や第三勢力の救国会系の青年運動が活発に動き、蒋介石・国民政府の「安内攘外」政策などを突き上げてきた。こうした中で国民党青年団体の組織化は決定的に出遅れていた。蒋介石・国民党は状況打開のため、三七年日中全面戦争の勃発後、やっと組織化に動きだした。三八年五月二九日武昌開催の国民党臨時全国代表大会で三青团の設立が決定され、七月九日三青团中央団部がやっと成立した。

ところで、日本における三青团に関する研究は管見の限り皆無と考えられるが、①王良卿『三民主義青年団与中国国民党関係研究 1937-1949』近代中国出版社（台北）一九九八年があり、三青团を巡る国民党内の派閥間抗争に焦点をあて充実している。②劉麗慧『抗戦時期中国国民党党政関係調整之研究』『復興崗学報』第八四期、

二〇〇五年は、抗戦期（1937～45）は党・政・軍を重視する必要があるとするが、主に国民党と政治機構の関係を論じ、三青团も重要としながらも僅かに言及するだけである。なぜかという点、史料の多くが抗戦よりも三青团を巡る派閥抗争に関するものがほとんどであるという事情もあるのだろう。その他、抗戦期の別テーマの中で三青团について触れるものは一定程度あるが、本格的に論じる単著、論文は意外なほど少ない。

そこで、本稿では、筆者の従来からの研究テーマである「藍衣社」、「C・C団」などの特務活動を本格的に考察する場合、三青团は捨象できないテーマと考え、国民党との関係、派閥抗争のみならず、抗戦面での活動を含めて、その実態解明に挑戦してみることにした。これは、同時に中国青年運動史・青年団体を考察する上で看過できない重要テーマであり、かつ中国特務「C・C団」、「藍衣社」という中国「反共抗日」集団研究の不可欠な一環と考えるからである。具体的には、三青团成立背景から国民党、中国特務「C・C団」、「藍衣社」との関係、「反共抗日」に関する姿勢や抗日動態、中国内のみならず海外各国、華僑との関係、及び三青团の本質、特色、幹部養成について実証的に考察を加えたい¹⁾。

史料としては、日本、中国、台湾で入手したものを基本史料とするが、国民党系では『中央日報』、中共系では『新華日報』、及び台

湾の中央研究院近代史研究所檔案館、国史館、国民党中央党史委員會各所蔵の檔案などを使用し、中国人民政治協商會議全國委員會編『文史資料選輯』合訂本（第一～一〇〇輯）、文史出版社（一九八六年）所収の回顧録も使用する。特に福建省檔案局で入手した檔案は貴重であり、日本植民地台湾の対岸にある福建省の三青团の動態に注目したい。なお、三青团との関連人物は多いが、とりわけ蒋介石、張治中、陳誠、蔣経国、陳立夫、康澤など国民党大幹部の三青团に関する主張、動向に注目したい。彼らは果たして三青团をどのように考え、どのようにかかわったのか。

一 三民主義青年団の創設とその背景

一九三七年七月盧溝橋事件後、蒋介石は青年が中共根拠地の延安に行き、抗戦に参加することを恐れ、陝甘寧辺区を封鎖した。同時に三青团などの組織を通して「抗日」を掲げ、大後方と陥落区の青年たちを吸収しようとした。こうして国共両党は青年を争奪しあうことになる。

ところで蒋介石は三青团の組織化に当たり、最初はヒトラー・ユングレントの如き大衆的青年組織を考えていたようである。とはいえ、当初の工作としては、国民党以外の中共などの政治勢力をpushさえ、青年運動における国民党の指導権確立が急務であった。その準備工

作としてまず「国民党派別組織樹立禁止法」を発令し、国民党内の「藍衣社」・復興社、「C・C団」の如き党内秘密組織の解散命令を出した。だが、実は形式的なもので僅かに経費の支出方法を変えたのみであり、これらの派閥、組織を存続させた。

こうして、蒋介石、陳立夫、劉健群、康澤四人は全国的に統一した国民党系青年団の必要性を論じた。三七年九月中旬、第一回会議で蒋介石はすでに抗戦が開始されたのであるから、「党部」「C・C団」(「黄埔軍校」同輩)、「藍衣社」(「改組派」(汪精衛派)の団結が必要と力説し、このための研究を指示した。そこで、陳立夫は「C・C団」の張道藩、徐恩曾、周仏海、余井塘、蕭錚の五人、「藍衣社」系の賀衷寒、康澤ら四人を集めたが、議論百出で何らの成果もなかった。そこで、蒋介石は陳立夫、劉健群、康澤と会談した際、陳立夫は国民党下部組織という位置づけを明確にするため、青年団の名称を「中国国民党三民主義青年団」とすることを主張したが、蔣を含む三人は「中国国民党」を付すと繁雑となり、不必要で、「三民主義青年団」で十分として反対した^③。なお、康澤の回憶では陳立夫の三青团設立での役割が低く、陳の意見は尽く退けられたという。ここで、康澤は①復興社^④の精神を三青团に移植する、②復興社員が志願により各地で率先して三青团に入団する、③三青团が復興社を核心とすることについても蒋介石の同意を得たとする。ただし、

③については陳誠が猛反対した^⑤。

三八年三月二十九日、中国国民党臨時全国代表大会が重慶にある国民政府大講堂で開催された。ただし会議自体は前線で活動中の軍代表の便を考慮して武昌の武漢大学で開かれた。代表二五五人、中央執行監察委員九八人等々、計四〇三人であった。そこで、蒋介石は抗戦情勢を説明し、朝野が「戮力同心(一つの心で力を合わせる)」ことを呼びかけた。議案は抗戦の必要に依じて党務、政治、軍事、経済、教育など非常に多かった。三一日に「改進黨務並調整党政關係案」で、「領袖制度の確立」、「(三民主義)青年団の設立」、「党政關係調整の原則」が採択された。特に重要な決議は四つとされ、①『抗戦建国綱領』の制定、②蒋介石を国民党総裁に推挙し、明確に制度上全党の領袖と規定、③国民参政会を新設し、抗戦の最高民意機關とすること、そして、④予備黨員制度(全国各区分部が独自におこなう国民党員の養成・訓練で、訓練方法も一定でなかった)を廃止して三青团新設を決議し、国民党が全国青年を訓練し、三民主義を信奉させるとした。大会は四月一日に閉幕し、大会宣言で長期抗戦の意義を説明し、『抗戦建国』を最高基準とし、団結し共に国難に赴こうと訴えた^⑥。

とはいえ、この時も三青团の位置づけは簡単に決まったわけではなく、派閥原理や国民党に対する認識の違いを浮かび上がらせた。

例えば、陳立夫は三青团を国民党員の訓練団体とし、全ての三青团員は「二五歳」で自動的に国民党員とすることを主張した。党部を掌握する「C・C団」に توسطして三青团を党部と連動させることで、三青团をコントロールできるのみならず、党部における「C・C団」勢力の拡大にも必然的に繋がるとの見通しがあった。それに対し、書記長陳誠、組織処長胡宗南の代理である「藍衣社」の康澤は「二五歳になっても必ずしも国民党員にはしない」と主張し、厳しく対立した。⁷⁾

三八年五月武昌開催の国民党臨時全国代表大会で三青团創設が決まった。かくして、七月中央団部が成立し、中央臨時幹事会が設置された。常務理事には陳誠、朱家驊、陳立夫、賀衷寒、張厲生、段錫朋、陳布雷、譚平山、谷正綱の九人で、彼らを含む幹事三一人は、蒋介石の意向に沿って超派閥的人事であった可能性が強い。なお、第三勢力の譚平山、盧作孚、章乃器の三人が含まれ注目されるが僅かである。その目的は①予備黨員制度の廃止、②抗日青年を吸収し、中共と切り離すことにあった。当然、第三勢力系の青年も吸収しようとした。中共系の青年組織に対抗する目的もあつたため、必然的に中共関係者は含まれず、反共抗日的色彩を残すものとなった。

三青团中央団部の成立時、人事は混乱を極め、「C・C団」と旧復興社（「藍衣社」）のポスト争奪は激烈であつた。蒋介石は「第一

の後継者」として陳誠を中央臨時幹事会書記長とし、旧復興社書記の康澤を組織処長、「C・C団」の谷正綱を社会服務処長とし、「C・C団」に五四運動の「四大金剛」ともあがげられた段錫朋を人事審議委員会主任等々に任命した。青年幹部班主任の選抜では、「C・C団」が触手を伸ばし、陳誠も直系の人物を入れようとし、康澤は兼職を望んだが、最終的に蒋介石は三青团中央幹事の桂永清に担当させた。⁸⁾

三八年六月一六日蒋介石は三青团団長名義で全国「青年に告げる書」を発表し、「全国の優秀なる熱血青年及び革命分子を網羅する所の唯一の組織たらしむ」ことを宣言した。その内容は以下の通り（要約）。

青年は革命の先鋒隊、国家の新生命であり、凡そ社会の進化、政治の改革は青年の動きによるものであつた。つまり我国の近代歴史、例えば、辛亥革命の満清打倒、民国一五、六（一九二六、二七）年の軍閥打倒も青年が主力であつた。現在の「抗戦建国」の艱苦な事業も全国青年は団結して共同努力せよ。

本団誕生の意義は、第一に、「抗戦建国」の成功を求め、抗戦必勝、建国必成を期すために国家民族の重厚な力量を養成し、それを基礎とする。いわゆる重厚な力量とは全国青年の覚醒と団結である。だが、一般的に教育散漫の結果、紀律を守る習慣はなく、団体生活の

訓練はなく、愛国精神を放縱に任せた。今まさに徹底的に改革し、紀律を重んじ、厳格に訓練し、旧来の悪習を矯正する。

第二に、本団の誕生により国民革命の新力量を集中させる。青年は新たな革命力量を産み出す源泉である。本団で青年は統一的意思をもち、主義の薰陶を受け、並びにその魂を鍛錬し、智能を發揮し、思想行動を指導し、革命事業を継続する新生命とならなくてはならない。今日、中国が青年を育成する所以はただ一個の国家、一個の主義、一個の努力という要義を示すことにある。知識分子は党派を問わず、真に国家民族のために着想するならば、本団の旗の下に集合し、青年育成、革命完成するため努力せよ。

第三に、本団誕生は三民主義の実現を求めためである。総理(孫文)の三民主義は元来「革命建国」の最高原則で、抗戦期には、とりわけ拳国民衆の一致した信念である。本団は全ての青年に組織・訓練の中で三民主義を実現する勇気を養成する。

本団が国家に負う重大使命は、全国青年を集め、『抗戦建国綱領』に努力し、二大使命である三民主義実現、敵侵略者の「外侮」の消滅により、独立自由な新中国建設にある。

本団の青年は以下の特殊任務を負う。

①積極的な戦時動員参加—全国総動員計画に基づき、国防、産業、交通、及び宣伝教育各部門で積極的に活動する。

②軍事訓練の実施—抗戦過程中、青年は皆、厳格な軍事訓練を受け、団員一人一人が国家・民族防衛のための技能をもつべきである。この軍事訓練には「忠党愛国」の精神訓練、身体強健の体格訓練、刻苦奮闘の生活訓練、迅速確実の行動訓練を包括する。

③政治訓練の実施—三民主義国家の建設に必要な政治素養、及び四権行使と地方自治などの実施に重要な智能を具備させ、併せて民権を習熟し、大衆を組織化、指導する方法を初歩的に理解すべきである。

④文化建設の促進—国家の強弱は一般国民の文化水準によってほとんど決まる。我国民衆の知識レベルは列強と比してはるかに劣っている。知識青年は自発的に奮起し、一致して非識字者一掃の工作に参加し、大衆教育、及び戦時宣伝の推進に協力すべきである。⁹⁾

以上の蔣介石の方針に則って康澤はまず中共指導下に各党各派を含む中国学生救国連合会など四団体の責任者を喚問して解散を命じた。また中共が中共黨員の国民党、及び三青团への加入を要求すると、国民党加入は拒絶する一方、三青团加入を承認した。¹⁰⁾

二 三民主義青年団の陣容と武漢抗戦

三青团自体は陳立夫発起と考えられるが、蔣介石指名の「団章」起草者には陳立夫の外、譚平山らがあり、陳誠召集の研究会で討議

することになった。そして、六月籌備委員会では最後の草案を確定し、团长蔣介石の審査・承認を得るという手順で「団章」は正式に公布された。換言すれば、陳立夫の意見はこの過程で完全に相対化されたのである。結局「団章」（三八年六月公布）では、団員資格は「凡そ中華民國の青年で満一八歳以上、三八歳に至る者」（第三条）となった。^①

一九三八年六月一七日「三民主義青年団団章」が発表された。元来、三青团は抗日民族統一戦線組織（ただし、三民主義は一貫して強調するが、新三民主義の「連ソ、容共、農工扶助」の三大政策が主張された形跡はない）で、前述の如く中共系青年も入団可能とされた。そのため、当初、中共系新聞である『新華日報』も重視し、翌日の紙面で（六月一八日付け）で「三青团」の「団章」を掲載した。それを要約すると、以下の通り。

第一章「総則」で、本団は革命青年を團結させ、三民主義に努力、国家防衛、民族復興を宗旨とする（第二条）。

第二章「団員」で、凡そ中華民國の青年で、年齢満一八歳から三八歳に至る者は性別を問わず、団員二人の紹介で、志願書に必要事項を記入し、中央団部の審査を経て、本団団員となる。ただし青年団各級幹部、及び特別許可の団員は上述の年齢制限を受けない（第三条）。入団時、「私は三民主義を誠実に実行し、团长の命令に服従

し、団章を厳守し、決議を執行し、新生活信条を實踐し、国家に忠を尽くし、人民に服務し、労苦を厭わず、犠牲を惜しまない。もし違反すれば、嚴罰を願う」（第四条）と宣誓する。

第三章「組織系統」は中央団部、支団部、区団部、分団部、区隊、分隊に分かれる（第七条）。このように軍隊形式に編制された。

第四章「团长」は中国国民党總裁が兼務し、団務を総攬して一切を決定（第八、九条）。

第五章「評議会」評議長は一人、評議員は若干人で、团长が招聘する（第一〇条）。評議会の職権は①本団の最高方針を議定し、並びに全国工作の計画。②新規約、改革すべき事項の審議（第一条）。

第六章は「中央団部」（1）幹事会を設け、团长は幹事三五人、候補幹事一五人を選抜し、これによって組織する（第二二条）。幹事会の職権で、①团长命令の執行、②工作計画の決定、③下級団部を組織し、指導、監督する、④監察会から送付された執行案件の処理、⑤予算・決算の編成と全国財務の掌握（第一三条）。团长は幹事から九人を選抜し、常務理事とし、常務理事会を設立（第一四条）。幹事会は書記長一人を設け、团长が常務幹事からこれを選抜し、常務幹事会は一切の事務処理に責任を持つ（第一五条）。

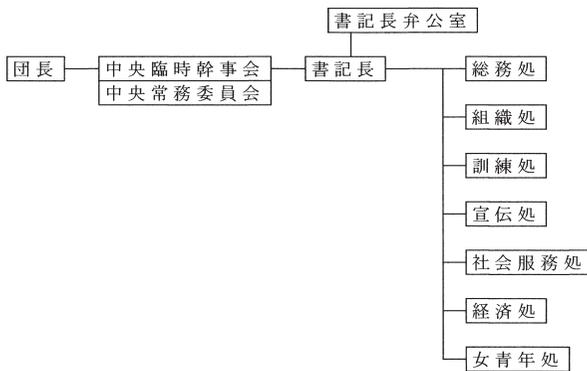
（2）幹事会の下には、①書記長弁公処、②組織処、③訓練処、④宣伝処、⑤社会服務処、⑥経済処、⑦総務処、⑧その他の特殊組織設

ける(第一六条)。

(3) 中央団部は監察会を設け、団長が監察一五人、候補監察九人を選抜(第一八条)。監察会の職権は①団務の監察、②団員の生活と言動の監察、③全国決算と経費収支の監査、④規律違反の団員の検査、審判(第一九条)。団長は監察の中から五人を選抜し、常務監察会を組織する(第二〇条)。監察会は書記長一人を設け、団長が常務監察から選抜し、常務監察会に対して一切の事務処理の責任を負う(第二一条)。監察会は「稽核」(会計監査)、検査、審判三処を設ける(第二二条)。

かくして、三八年七月九日蔣介石は武漢で三青团を成立させた。三青团の上部機構は中央臨時幹事会の下に中央団部を設け、団部内には書記長弁公室の下に総務、組織、訓練、宣伝、社会服務、経済、「女青年」各処があつた(図1)。団

図1 三民主義青年団中央臨時幹事会組織系統図



務の発展に伴い、各省・市・県、学校、及び海外華僑の集中地区に支・区・分団を準備し、各級の指導人員を必要とした。そこで、中央団部は工作人員の養成訓練弁法を計画し、中央訓練委員会の同意を経て蔣介石が批准し、中央訓練団青年幹部班が設立され、三八年第一期が開始された。

三青团創立時期の陣容をみると、【団長】蔣介石、【書記長】陳誠、書記長代理朱家驊、【常務幹事・幹事】は上記の通り。【弁公室】主任葉溯中、【組織処】処長胡宗南(代理)、康澤、副処長任覺五、陳世達、【宣伝処】処長黃季陸、副処長郭斌佳、鄧文儀、【社会服務処】処長盧作孚、副処長張伯謹、黃宇仁、【經濟処】処長何廉、副処長陳介生、白狀元、【訓練処】処長李東桓(代理)、李楊敬、副処長戴志齋、谷正綱となった。

三青团への各派閥の影響力を考察するため、最高指導部の構成を見ておきたい。なお、派閥確定ができない者には「？」を付した。

三八年六月三青团の中央臨時幹事会常務幹事は軍に圧倒的力量を有する陳誠(軍事委員会政治部長。なお、中央直系軍の軍高級幹部からなる「干城同連会」を指導)、朱家驊(「C・C団」、陳立夫(「C・C団」、賀衷寒(「藍衣社」、張厲生(「C・C団」、段錫朋(「C・C団」、陳布雷(「C・C団」、譚平山(第三勢力)、谷正綱(改組派・社会部部长・特務「憲兵幹部団」)の九人である。幹事三一人は上

記九人の外、梁寒操（「藍衣社」？）、康澤（「藍衣社」）、李任仁（「廣西派」）、周仏海（「C・C団」）、李揚敬（「藍衣社」）？・黃埔軍官学校中将教育長・中央訓練団副教育長、曾宝蓀（国民党内民主派？・教育者・国民参政員）、嚴立三（？）、王世傑（国民参政会秘書長・宣伝部部長・外交部部長）、張道藩（「C・C団」）、劉健群（「藍衣社」）、鄭彦棻（？）、黃仁霖（黃埔同学生会勵志社総幹事）、胡宗南（蔣直系軍人）、王東原（陳誠系・軍事委員会政治部副部長）、黃季陸（西山会議派・広西派シンパ・広州民国日報社長・立法院立法委員）、甘乃光（国民党左派）、盧作孚（第三勢力）、何廉（第三勢力？・無党無派・南開大学教授・農本局総経理）、陳良（「藍衣社」・黃埔軍校經理処・軍政部軍需署副署長）、葉潮中（「C・C団」・考試院考選委員会委員）、程滄波（「C・C団」・中央日報社社長・国民党中央宣伝部副部長）、章乃器（第三勢力）である。後に中央団部は、この陣容を国民党重要幹部、青年運動指導者、学者、社会事業家、無党無派・反対党派組織者を包括し、「全国人材をこの中央機構に入れ、全国青年の意志力量の集中を期した」と総括した¹³。

以上の陣容に分析を加えると、軍関係が多く、抗日色彩の強い「藍衣社」系が進出しているように見えるが、同時に軍に圧倒的力量を有す陳誠をキャップとし、かつ蒋介石直系グループを配すことで、「藍衣社」の独走を押さえようとしていることが見て取れる。陳立

夫は「C・C団」が党と結びつけることで単独で三青团の指導を考えていたらしく、後退した形で不満ようだが、常務幹事には九人中五人とかなりの勢力を保持している。ただ、それを除く幹事は二人中、四人に留まった。すなわち、蒋介石の意向が反映して三青团は「C・C団」のみの影響下に置くことを避け、国民党内の各派閥から少数とはいえ、幅広く人材がでており、各派閥のバランスの上に構築されたといえよう。また第三勢力にも配慮を示し、譚平山、盧作孚、章乃器を入れたが、何廉を含めても僅か四人であった。結局のところ中共関係者はいない。以上のことから、「藍衣社」の抗日的色彩を持続させただけでなく、軍との関係を強めることで、三青团は軍を援助するのみならず、自らも戦闘に参加することを可能にした。後述する武漢での三青团の激しい抗日闘争はそれを物語る。第三勢力系の青年の巻き込みを狙ったが不十分であった。かつ「反共」的要素も根強く残り、国民党の青年団という枠組みから脱却できず、団員拡大を限界あるものとしたといえよう。ともあれ「C・C団」が狙った青年運動への影響力を高める起死回生策とはならなかった。

中央団部臨時幹事会が組織され、三八年七月九日「北伐誓師紀念節」から準備を開始した。そして、内部組織にも着手され、各工作も展開し始めた。その中で手続き、宣誓、登録した団員はすでに

五〇〇〇人余に達した。重要な省市府で準備が必要なところでは、すぐに人員を派遣し、団員を集めた。¹⁴⁾

この過程で中共系青年やその団体が廃止、排斥されるということが明確になった。

『新華日報』(一九三八年八月二一日)は「社論：抗議解散三団体」で厳しく批判し、衛戍総司令部政治部が青年救国団、中華民族解放先鋒隊、蟻社三団体の解散を命じたことに対し、驚きと憤懣を明確にした。そして、「武漢が危急の時、まさに民衆を動員し、武漢を防衛する時、最も活動した歴史を有し、大衆基礎のある三団体が却って解散させられた。このことは、全国人民を一致動員し、武漢を防衛するとのスローガンに背くのみならず、(国民)政府の武漢を堅持するとの国策にも背く」と断じた。

第一に、中華民族解放先鋒隊は中共直接指導下の青年大衆団体であり、華北事変以後、民族解放運動、抗日救国事業において最大の努力をしてきた。現在、全国各地に散在するその隊員は積極的に軍隊に参加し、(国民)政府指導の各種の抗敵工作、及び民衆運動に参加した。とりわけ陥落区域で、いかなる困苦も犠牲も恐れず、日本帝国主義との闘争を堅持し、反日の遊撃運動をおこなってきた。第二に、青年救国団は最も活動的な青年団体で、各種運動、とりわけ武漢防衛工作において積極的に苦しい工作に参加した。衛戍政

治部が工作隊組織化の命令を発表した時、すぐに五〇〇〇人の救護隊を動員した。まさに団体内の個別の共産党員が積極的に工作に参加し、成果をあげた。

第三に、蟻社は一グループの職員による文化救国団体であり、上海、武漢で良好な仕事をした。これらの団体が解散させられるとすれば、抗戦中の民衆動員も非常に困難となる。統一戦線中の民衆運動は相互援助、相互発展すべきであり、互いに牽制すべきではない。我々は断固として三団体の解散に抗議し、即刻三団体の活動の自由を回復することを要求する。中共、及びその指導下の民衆団体は、政府の抗戦国策擁護を終始堅持し、自己の一切の力量を動員し、政府を援助し、抗戦勝利の目的を勝ち取ることを願っている。ただ抗戦国策、民族団結、抗戦利益に背き、民族利益に背くような、この種の挙動には厳重な抗議を示さざるを得ない¹⁵⁾。と。すなわち、国民党にとって中共系青年団体を禁止、解散させて国民党系の三青团に吸収し、統一を強行する具体的なステップといえよう。換言すれば、三青团に参加しない抗日青年は不要ということになる。

団員数は武漢創立時、約一万人と称されたが、現在(一九三九年)は六、七万人から一〇万人に達している。とはいえ、公開的な青年大衆組織であるため、比較的容易に入団できるが、入団後の待遇劣悪、月賃金一五元に過ぎず、その上任務が苛酷なため、かなりの動

揺分子も発生したといわれる¹⁶⁾。こうした不満も存在した。

抗戦が武漢防衛段階に突入すると、多くの進歩的青年は中共の呼びかけに呼応して延安に向かい、そこで抗日救亡工作に参加した。他方、武漢残留の青年は素朴な愛国的な感情を有しており、三青团がその受け皿の一つになった。

三八年九月三青团武漢支団部籌備処が「告武漢青年書」を出した。

「青年は革命の主力であり、武漢は抗戦の中軸である。我々、武漢に居住する青年は、一般青年の責任を担うのみならず、さらに偉大で神聖な使命を担わなくてはならない」。その使命とは、「大武漢防衛にある。……現在、三民主義青年団武漢支団部籌備処が成立した。その第一の工作が『武漢青年を集合して大武漢防衛に参加すること』にある」。周知の如く、武漢は歴史上、地理上、軍事・政治・交通・文化上、重要なところである。したがって、我々の工作は随時随地、慰労、救護、宣伝、糾察、及び食糧統制、運輸、人力と物力の動員等々、すべて極めて重要なものである」。そして、「武漢で三民主義の堡壘、中華民族の金城を築きあげる」。「武漢の青年たちよ、時は来た。……我々は時代の最前線に立たねばならぬ。自由、独立、平等のために、世界人類の和平と正義のために、万悪の倭寇（日本）を駆逐せよ¹⁷⁾、と呼びかけた。

ところで、三八年中秋節には観月会が催され、桂永清は「中央訓

練団青幹班（青年幹部班）」第一期學員を広場に集めた。当晚、蒋介石、宋美齡も湖浜の別荘で月見をしており、桂永清に全女學員を連れてくるように指示した。彼女らが到着すると、飲茶をし、歌舞が始まった。宋美齡の意向を受けて、中央団部は、二日後に青年幹部班に全ての女學員を新生活運動促進總會婦女幹部訓練班で訓練を受けるように指示した。新生活運動總會婦女指導委員会の宋美齡は漢口で新生活運動總會婦女幹部班を設けて訓練していたが、人数が少なかった。したがって、中秋節の時、宋美齡は三青团青年幹部班で訓練中の女學員六、七〇人を見て喜び、蒋介石の黙認を得て彼女らを婦女幹部班が引き受けることを求めた。ところが、女學員の多くは慰労や児童保育工作を希望せず、抵抗した。そこで、康澤は桂永清らに女學員代表と交渉させた。桂永清らは中央団部の命令は絶対だが、彼女らの意思を尊重し、三青团幹部班に籍を残したまま、ひとまず婦女幹部班に行き、最終決定は修了後に決定すると説得した（結局のところ、修了後に三分の一が新生活運動の婦女指導委員会、残り三分の二は三青团中央団部や各支団で働くことになる¹⁸⁾。

武漢国民政府時代に三青团は六〇〇人を選抜し、第一期訓練を三八年一〇月三日に開始した。だが、一〇月二日広州が陥落し、一〇月一九日団長蒋介石は一部を残し、武漢陥落に危険が迫ったことから撤退命令を出した。一〇月二三日に第一期訓練班を急ぎ修了

させ、二四日撤退せざるを得なくなつた。

ただし三青团中央団部は武漢支団部を準備し、康沢が支団部籌備処主任を兼任、楊子福が書記に就任し、新進団員一五〇〇人を指揮し、「大武漢防衛」工作に参加させた。三青团団員は武漢に残留し、組織処長代理康澤、宣伝処長黃季陸が残留部隊を指揮して、秘密工作と遊撃工作を担当し、金亦吾は民衆一万人余を集め、機関銃、迫撃砲などで武装し、日本軍と戦つた。また、三八年八月武漢支団部の指揮の下、戦時服務総隊は青年学生を糾合して三個大隊（隊員各一〇〇〇余人）を編制した。彼らは軍事委員会戦地服務団主任の黃仁霜指揮下に前線に赴き、軍隊と共に行動した。日本軍の動向調査もおこなつた。そして、構築工事、消防、宣伝、慰勞、徵募、救護工作进行した。このように、武漢では三青团と民衆との結合に成功している。団員張孝揚は戦死した外、日本軍に対する激しい抵抗な中で、例えば三九年漢口分団主任陳子如、漢陽分団主任宋啓東ら多数が日本憲兵や「傀儡」などによって殺害された。

その他、三青团とは別組織と考えられるが、第九戦区総動員委員会指揮下に戦時民衆工作隊八万人も組織された。戦時民衆工作隊は食糧、糾察、運輸、水雷（設置？）、燃料、救護、調査、登記、疎散、慰勞、力役、宣伝などの民衆工作に当たつた。内二〇〇〇人が救護・埋葬工作をし、また二万人を市区に残留させ、傷兵の救護、難民児

童の收容、及び軍需品の運搬などの撤退前の工作をおこなさせた。

その後も、戦地服務総隊、戦時民衆工作隊が戦区農村に入つて宣伝、組織化を担当したが、工作地域は河南省西北部、山西、陝西、甘肅省南部、湖南省中西部の最前線と広範囲であつた。そのため、日本軍はもちろん、そこを基盤とする中共のみならず、「C・C団」、「藍衣社」、とも対立したとされる。また、遊撃部隊は上海租界を始め、主要陥落都市で特務工作隊として活動した。¹⁹⁾三青团の抗日精神は旺盛であり、武漢戦前後、さらに武漢陥落後も戦時民衆工作隊と共に多方面で重大な役割を担つたことは間違いない。

ここで「中央訓練団青年幹部班」について説明しておきたい。これは、三青团中央青年幹部学校の前身で、三青团上級幹部育成の専門訓練機構であつた。桂永清、戴之奇らが第一期の開始・運営にかわり、第二期から第五期は張治中、康澤が主宰し、三青团の骨幹分子二〇〇〇人余りを養成訓練した。青年幹部班が中央青年幹部学校に発展した後、蔣経国が責任者となり、研究部三期、研究部一期を継続運営し、さらに養成訓練した者は約二〇〇〇人で、合計四五〇〇人である。²⁰⁾

中央訓練団青年幹部班第一期は、日本軍の爆撃で遅延し、三八年八月末に中央訓練団と三青团中央団部の二重の指導を受けた。その訓練内容は三民主義、蔣介石の指導を骨子とし、団務知識や工作能

力を熟練し、「抗戦建国完成のため奮闘する」を趣旨とする。

第一期訓練の内容は政治、軍事、団務、及び「文体活動」の大きく四つに分かれる。

①政治方面―訓練の中で最も重視され、精神講話、特約講演、政治課程、訓育訓話、小組討論と個別談話などであった。精神講話は學員に三民主義哲学思想とファッシズム精神を注入を重視し、早朝の国旗（青天白日滿地紅旗）の掲揚後、蒋介石や中央訓練団教育長の陳誠が主に武漢大学講堂で週一回講話をおこなった。いわば三民主義、ファッシズムを骨幹としたものであった。

②軍事方面―訓練の中で重要な位置にはなく、軍事管理の実施だけであった。ただし一般の軍事学術科もあり、『歩兵操典』、『射撃教範』、『野外勤務』、『陣中要務令』などの小冊子を学んだ。学科は桂永清、戴之奇などが教授した。運動場では教練を受け、何回か野外演習、実弾射撃なども実施された。

③団務方面―政治方面に次ぐ重要な位置にあった。三青团の新設により、學員は党政軍各部門から来ており、教学両面から団務訓練が重視された。団務訓練は、まず中央団部各処、会、室の人員が団務課程を講義した。その後、小組に分かれて討論した。組織処長康澤は三青团の組織原則と精神を教え、かつ各省、市、県に支、区、分団、大学・専門学校・院に直屬分団、さらに海外華僑集中地区に

団体を設立準備し、さらに陥落地区に秘密裏に組織する具体的な方法と注意事項を講義した。康澤は党・団の関係では、陳立夫が主張する三青团は「党に従属する」という意見に反対し、ここでも三青团の「先鋒隊」としての役割と独立性を強調した。すなわち、康澤は、三青团が党ではなく、団長（蒋介石）の直接指導下で青年の組織化、訓練の全責任を負うと主張したのである。

④文体活動方面―徳性の陶冶、及び健全な身体と精神の鍛錬にある。學員の登山、水泳などの外、土曜日毎に特に男女學員は夜の親睦会で各種の演出を楽しむ。學員の抗日意識を鼓舞するため、音楽教官の楊大鈞は「義勇軍行進曲」（現在の中華人民共和国の国歌）や「流亡三部曲」などの進歩的歌曲を教えた。ただし集会では専ら「中国国民党党歌」、「国旗歌」、「新生活運動歌」、及び三青团の「国歌」が唱われ、桂永清もまた蒋介石を讃える「領袖歌」や「中央訓練団国歌」を唱わせた。²⁾

いわば政治、団務両面に最もウエートがあり、思想教育と上意下達の団結・統制が重んじられたといえそうだ。ただし基本的な軍事知識、野外演習、実弾射撃は実施され、戦闘も可能であった。意外にも軍事の比重が低い。他に士気を鼓舞する歌などが重視された。

表1によれば、三青团団員の出身比率は、訓練生が三七・一％で突出しており、次いで軍隊・警察一七・二％、教育（教師などであ

三民主義青年団の創設とその活動 — 「反共抗日」青年運動の軌跡— (菊 池)

ろう) 九・九%、行政(中央行政か) 八・六%、そして、学生が八・一%である。農業は〇・六%と低く、三青团は都市型の組織であったが商業関係の参加は一・七%と低い。太平洋戦争勃発後の四二年を見ると、学生の比率が前年から一挙に高まり三六・九九%で、逆に訓練生は一・二・六七%に激減する。これは訓練生を経ずに直接学生を入団させた可能性を示唆する。軍隊・警察も一二・二二%、教育は九・〇一%を維持している。地方自治が五・六九%は地方公務員と見なせ、各「地方自治」と運動していたことを意味する。四五年は八月の中国勝利・日本敗戦後か否か不明なので、四四年を見ると、学生は一貫して伸びており、四四・八七%、訓練生は九・二九%、軍隊・警察が九・八二、教育は八・三四%であり、農業は相変わらず二・四六%と低比率で

表1 三青团団員の出身比率

年	農業	工業	商業	党務	行政	地方自治	軍隊・警察	政治訓練	教育	自由業	団務	学生	訓練生	その他
1939	0.6	1.0	1.7	1.5	8.6	—	17.2	2.9	9.9	0.7	2.3	8.1	37.1	8.4
1940	0.8	1.2	2.5	1.4	5.8	5.6	19.6	3.7	11.0	3.0	1.7	13.7	25.7	7.0
1941	1.6	1.57	3.58	0.74	4.82	5.22	14.41	2.48	9.87	0.59	1.25	31.61	15.98	6.28
1942	2.26	1.56	3.43	0.68	4.43	5.69	12.21	2.07	9.01	0.58	1.20	36.99	12.67	7.22
1943	2.34	1.58	3.36	0.65	4.21	5.59	11.31	1.84	8.58	0.56	1.24	40.28	11.51	6.95
1944	2.46	1.74	3.45	0.57	4.25	5.54	9.82	1.58	8.34	0.50	1.16	44.87	9.29	6.43
1945	2.68	1.84	3.39	0.53	4.23	5.79	9.09	1.41	8.29	0.44	1.10	46.6	8.27	6.34

出典：王良卿『三民主義青年団与中国国民党関係研究(1938-1949)』近代中国出版社(台北)1998年、119～120頁。なお、各年の合計が「100%」にならないものもあるが、原数字を使用した。また、1939、40各年は小数点1桁まで、それ以外は小数点2桁までであるが、原表のままで統一しなかった。

あった。

三青团は、軍事委員会政治部と共に新設された団体で、国民党による青年運動掌握であったが、多数の共産分子、第三勢力の要素を含んでいた。殊に構成分子の大多数は失業青年学生で左翼的傾向が顕著であったとされる。²²⁾

ここで押さえておく必要があることは、周知の如く三八年一二月に汪精衛が重慶を脱出し、ベトナムのハノイに逃亡した。そして近衛声明に呼应して「和平・反共・救国」を打ち出していることである(四〇年三月には、南京汪政権が成立した)。この結果、必然的に汪精衛は三青团の「敵」に位置づけられることになる。

ところで、国民党系の主要新聞『中央日報』(一九三九年九月二日)によれば、三九年九月一日に幹事・監察両会連席会議は、团长蔣介石自ら臨席し、組織発展、工作展開に関して指示した。午後三時、幹事会書記長陳誠が教育・文化・新聞各界を招待し、中国内外の記者、大学学長、及び文化団体代表など一五〇人余が参加した。そこで、陳誠が三青团正式成立の意義を説明した。王芸生、張西曼、王芄生らが祝辞を述べた。²³⁾つまり、不可思議なことに三青团は一年後、やっと基盤が固まり、本格的な活動に入ったとも読みとれる。また、武漢支団部の設立準備を並行して進めていたといえよう。

三 三民主義青年団の改組と反共化

一九四一年一月国民党が皖南事変（新四軍事件）を起こし、反共姿勢を露呈した。とはいえ、押さえしておくべきことは、枠組みとして第二次国共合作・抗日民族統一戦線は依然として継続し、崩壊していない点である。この時、三青团青年幹部班は第二期であり、抗戦第四年目に当たった。第二〜五期は中央幹事会書記張治中が主任、康澤が副主任をそれぞれ兼任していた。その他、第一期終了後、重慶で継続され、各地に支、区、分団も設立された。例えば、重慶支団は一九四〇年に開始されている。

かくして、三青团団員数は一貫して増大したが、一九三八年九二

表2 中国における三青团地方団・隊統計表（1938-1944）

年	支団	区団	分団	区隊	分隊
1938	5	8	40	36	104
1939	22	17	206	734	4,497
1940	25	6	341	2,531	11,786
1941	25	8	457	4,168	18,676
1942	25	8	516	5,245	28,170
1943	24	13	578	5,659	26,763
1944	25	24	920	10,332	40,836

出典：『革命文献—抗戦時期之青年運動』第63輯、2～3頁。

〇七人、三九年八万九千六百四十四人、四〇年二万五千九百一十四人、四一年四万二千一百一十一人、四二年五万三千七百七十六人、四三年六万二千〇四六一人、四四年八万七千八百六十五人、中国勝利、日本敗戦時には一〇〇万人を越え、四五年一二万五〇〇〇一人であった²³。

表2によれば、三青团は四二年段階で中国での支団二五、区団八、分団五一六、区隊五二四五、分隊二万八千一七〇である（なお、同年一月段階で団員は合計五万三千七百四十六人）。四四年には支団二五、区団二四、分団九二〇、区隊一万〇三三二、分隊四万〇八三六に達している。このように、三青团は全体として着実に伸び続け、一定の基盤を築いたものといえよう。

これらは「地方」、「学校」、「辺疆」、「海外」の四つに区分される。

①「地方」は当初、人材育成に力点が置かれ、重慶遷都後、発展した。

②「学校」は高級中学以上の青年を重視し、品行、学識、精神、身体、及び国民党の主義に対する信奉から厳しく選抜し、学校内組織の発展を強化した。

③「辺疆」は全国青年組織化の観点から重視されたが、環境の制限からチベットなどに団務籌備員を派遣し、調査段階に留まり、三民主義を中心を置いたため、あまり発展しなかったようである。

蒋介石は青年幹部団第二〜五期の訓練を重視し、中央訓練団本部

と党政班の共催で青年幹部団の入団、卒団各儀式、「総理記念週」をおこなわせた。そこで、毎期學員は一〇回以上、蔣介石の講話を聴くことになった。その内容は「国家至上、民族至上」、「軍事第一、勝利第一」であり、国共合作、「團結抗日」は背後に後退した。また、「最高領袖（蔣介石）擁護」、「軍令政令の統一」の大きなスローガンが張り出された。そして、三青团内部では、中共と八路軍・新四軍への侮蔑し、非難した。講演者は戴伝賢、孫科、居正（司法院長）、于右任（監察院長）、何応欽、白崇禧、孔祥熙などである。例えば、孔祥熙は青年幹部班で「後方經濟建設の發展と戦時行政効率の増進」を講演した際、「孔子七五代目の子孫」と自称し、他方でマルクス主義を罵倒したという。²⁵⁾

青年幹部班は第二期から陳果夫に講演依頼をしなかった。なぜなら重慶国民政府が成立後、朱家驊は「C・C団」から分裂した。朱家驊は国民党中央党部秘書長から中央組織部長兼代理三青团中央臨時幹事会書記長に異動した。こうして、朱家驊系と「藍衣社」が密接に合作し、新勢力を形成した結果、対立する「C・C団」の陳果夫は講演に招かれなかったのである。とはいえ、「国父遺教」科目では、教育部長の陳立夫（陳果夫の弟）が主に講義した。陳立夫は講義の中で、「一つの党（国民党）、一つの主義（三民主義）、一人の領袖（蔣介石）」を強調した。三民主義を論じる際、当然のことな

から「連ソ・連共（容共）・工農扶助」の三大政策に言及しなかった。それ以前の旧三民主義を重視していたのである。また、康澤は蔣介石の「積極反共」に呼応して、「トロツキ分子」の葉青（任託宣）を何度も講演に呼び、「党派問題」を論じさせた。当時、葉青は中央軍官学校特別訓練班の政治教官であり、三青团重慶支団宣傳委員、青年訓導団講師を兼ねていた。葉青は中共を徹底的に非難した。同時に平津支団書記の韓家蘭と蘇北区団書記の唐旅程の殺害は八路軍、新四軍によると中傷し、學員の中共に対する憎悪をかき立てた。²⁶⁾

こうして、統一戦線形式で生まれた三青团は創立後、三年間で国共相克の激化にさらされ、他団体との摩擦を経て改編された。そして、四〇年六月の宜昌陥落の責任をとった形で中央要職を辞した陳誠の後退によって改組された。書記長に「反共的色彩」を有す張治中が就任した結果、「藍衣社」の色彩が濃厚になった。すなわち、【團長】は蔣介石のままであるが、【書記長】には張治中、【常務幹事】陳誠、陳立夫、譚平山、張厲生、段錫明、賀衷寒、黃季陸、鄭彥棻、李惟果、【弁公室】主任柳克述、副主任謝然之、【總務處】処長莊明遠、副処長項定遠、【組織處】処長胡宗南（代理）、康澤、副処長任寬五、程思遠、【宣傳處】処長葉溯中、副処長高良佐、【社會服務處】処長盧作孚、副処長張伯謹、【經濟處】処長何廉、副処長陳介生、白狀元、【訓

練処】処長王東原、副処長戴之奇（貴州省興義出身の軍人。抗戦後、第二七軍師団長を歴任）という顔ぶれとなった。

武漢抗戦の時は表面化しなかったが、国共摩擦が激化すると、左右両派の内的矛盾が露呈した。三青团の統一戦線的な性格は大きく後退したのである。そこで、張治中は書記長就任と同時に大粛清を敢行して左翼分子を清算、反共的姿勢を明確にした。この動向には、胡宗南、康澤、賀衷寒らの「藍衣社」勢力と張治中、何応欽の連繫が枢軸となった。重慶では張治中を主任に、組織処長康澤、訓練処長王東原を副主任とする第二期訓練班が成立し、九〇〇人の団員が訓練を受け、六ヵ月後には前線に配備する計画であった。三青团の特務工作的活動の拡大と共に、「藍衣社」、「C・C団」とも対立しつつあった⁽²⁸⁾とする。三青团が独自行動もしたということであろう。三青团は服務精神と技能の養成のため、四〇年九月一日正式に重慶付近に青年労働服務營を設立した。これは三青团と技術機関の合作組織であるが、三青团部が青年を募集し、試験を実施したため、大半が三青团員となった。ただし、主義と労働の訓練の外、大部分が技術訓練であった結果、技術教官は主な各技術機関からの派遣者であった。学生は修了後、それらの各機関に配属される。団長蔣介石は「社会のための服務」を要求した。災民救済は初歩で、すべての四億五〇〇万人同胞への衣服、食料の供給が服務精神の最高の

表現とした。主義の認識と技術訓練双方を受けた青年こそがこれをなし得る。青年労働營はそうした需要により生み出されたとした。建国の成功は全社会の青年が性別や貧富を問わず、参加することにある。三青团団員はこの種の精神を表現でき、呼びかけ、指導できる。建設工作に従事させようとすれば、建設技能をもたせなくてはならぬ。労働服務營は団員に必要な技術を与えることによって、主義への認識と奮闘の精神を強化でき、それぞれが社会各部門に分かれて工作に行き、各部門の模範となり、全国青年もそれを聞き従うことになる⁽²⁹⁾、とした。

また、四一年七月陶百川（国民党系の国民党参政員）は三青团三周年を記念して以下の提案した（要約）。

(一) 党と団との関係、及び工作の区分は最も重要なことである。希望することは、すべての党部、団部、黨員、団員が規定を遵守し、団は党の指導に服従し、党は団の発展を扶助することである。党と団の工作は政治・教育界で分担し、努めて重複を避ける必要がある。

(二) 工作は生命であり、三青团の工作は非常に多いが、最も重要なのは民間の痛苦を除去することにある。団長（蔣介石）は当面の三青团工作の指示を出し、「社会の弊害を改革すること、平民の経済生活を増進すること、団員が深く民間に入り、社会情報を探取し、並びにまず冤罪を調査し、それを団部に報告して、当地の政

府と合作してその痛苦を除いてやらねばならない」、と言っている。この一点だけでも青年団の社会に対する貢献は非常に大きく、社会の信頼と共鳴も大きくなる。

(3) 三青团は(自己)検討と自己批判を重視すべきである。この新作風は政府と社会の模範となる。最近の三青团の二つの会議における報告では、例えば、中央幹事会が提起した各項工作の改善方案もまず欠点を叙述し、その後には弁法を作成する。

(4) 新事業の成敗は幹部によって決定される。幹部養成と人事制度の樹立は非常によい規定である。ただ幹部問題で、最も注意すべきは団長の「青年団工作的根本要旨」で示された二つの要点である。①現在の学風不良、土気沈滞に対して教職員、青年幹部人員がまず自らの気質を変革し、一般青年を感化する必要がある。②青年を訓練、指導し、教育する仕事は、自ら勉めて聖人とならなくてはならない。

以上、四つの指示は党・団の協調、中心工作の認識、自己検討の習慣養成、幹部教育方針であり、青年団の前途と密接な関係を有す。青年団は「革命青年を訓練」する一つの大家庭、大学であり、志ある青年は共に「国家防衛・民族復興」の光栄なる責任を負うことを希望する。³⁰⁾

四二年一月一九日三青团中央団部の幹部訓練班が茶会を催し、

イギリス議会訪華団を歓迎した。書記長張治中、外交部長李惟果、三青团処長康澤らが接待し、三青团員、訓練班職員約二〇〇人が出席した。張治中の歓迎の辞で以下のように述べた。今日、「三青团五〇万団員」を代表して歓迎する。三青团の三つの中心目標は抗戦勝利、建国成功、及び三民主義の実現である。皆様に本団工作へのご指導を願うとともに、帰国後、本団の組織、精神、使命を英国青年に紹介していただきたい。そして、中英両国の青年が相互に理解しあい、さらに親密に団結し、未来の新世界建設に共同で努力するようにしたい。³¹⁾と。このように三青团と欧州青年との連繋も模索していた。

ところで、当初の計画通り三青团は中共から国民党・三青团への転向のパイプ役としても機能した。例えば、鄭有釗は転向後、「最正確の信仰—三民主義」を提出した。それによれば、各国には各国の歴史と文化、及び国情がある。「各国青年にはそれぞれ唯一の信仰がある。ドイツ青年はナチス主義と領袖ヒトラーを信仰する。イタリアの青年はファッシズムと領袖ムッソリーニを信仰する。ソ連青年は共産主義と領袖スターリンを信仰する。……: : : : : したがって、中国青年の信仰は疑いもなく総理(孫文)創造の三民主義、及び全国同胞の三民主義実行を指導する総裁(蔣介石)である」³²⁾と。鄭有釗の具体的な転向理由は不明であるが、明確なことは、各国のファシ

ズム、及びソ連社会主義の全体主義傾向に対する高評価と、それに連動した形で蒋介石・国民党と三民主義を持ち上げた。

軍事委員会委員長蒋介石の四三年五月一六日命令を代電し、戦地青年招致訓練工作状況、並びに工作連繫弁法を作成するとした。すなわち、戦地失業・失学青年招致訓練委員会と三青团は工作連繫弁法を相談の上、決定しており、これを三青团中央幹事会書記長の張治中、教育部長の陳立夫に審査、決定を求めた。その内容は以下の通り。

「加強戦地失学青年招致訓練委員会与三民主義青年团工作連繫弁法」(二〇月二〇日)

①戦地青年救済と教育の統一準備のため、戦地失学失業青年招致訓練委員会は三青团中央団部代表を(訓練委員)会常務委員に招聘し、かつ各地の招致訓練分会所在地の三青团書記を分会委員に招聘する。②敵後、及び戦区隣接各地の戦地青年招致站は三青团工作人員を招聘し、教導工作参加を原則とする。③各地の青年接待所各料教官はできる限り当地の三青团工作人員を招聘、兼任させ、訓練所内の青年管理に協力する責任を負う。④戦地青年の就業を振り分けは、各地の招致訓練分会が主に運営責任を負い、各地の三青团が協力する。就学を振り分けは教育部、及び各省教育長が主に処理し、三青团が協力する。本弁法は三青团と戦地青年招致訓練会が相談作

成し、施行した。⁽³⁾このように、戦地などの失学・失業青年にまで範囲を広げ、三青团が主に担当し、就学などでは教育部に協力した。

三青团はその基盤強化のため、「幼童軍」、「童子軍」、「少年団」(以下、「」省略)を創設している。

(一) 本団青年の組織化、訓練は在学青年と社会青年に分けられ、年齢で区分される。「学生」は初級小学の七歳から一〇歳であり、一律に「幼童軍」を編制。高級小学・初級中学の一一歳から一五歳は「童子軍」(同前)、一一歳から一七歳の「社会青年」は「少年団」(同前)にそれぞれ編制する。童子軍、少年団は審査合格を経て三青团に加入できる。

(二) 三青团が全国青年組織訓練の唯一の指導機構であり、童子軍、少年団の訓練と本団は密接な連繫をとる。全ての童子軍、幼童軍の各級指導幹部は本団団員を充てる。(イ)中央機構である童子軍總會は本団に隸属し、その全国理事會理事長は本団中央幹事會書記長が兼任。(ロ)中央童子軍總會の「榮譽評判委員會」は中国童子軍中央監事會とし、監事長には教育部長が兼任。(ハ)童子軍の地方機構として、各省(市)県には中国童子軍支分会を設け、その中に理事會、監事會を設置する。少年団は所在地の団隊管轄とする。

(三) 幼童軍、童子軍、少年団と三青团の訓練は相互に関連させる。①幼童軍の訓練は心身の發展に基づき教育法令と配合して実施

する。童子軍の訓練は「中国童子軍訓練原則」によって実施する外、主に国家民族の觀念と(三民)主義に対する認識の増強にある。少年団は特に識字教育、職業教育を重視する。②高級中学、大学の軍事訓練は本団と密接な連繫をとり、高級中学卒は「予備軍士」、大学卒は「予備軍官」の資格を取得する。

(4) 幹部：幼童軍、童子軍、少年団の基層幹部は統べて各地団部が訓練を実施する。その高級、中級幹部は中央の青年幹部学校で統一訓練する。

(5) 経費：童子軍、幼童団、少年団の経費は三青团経費の予算内に入れる。⁽³⁴⁾これはある意味で白紙状態の幼児から思想注入するというものであった。また、教育部との連繫もあるが、三青团は組織強化の一環として、幼少段階から成長段階に依じて訓練し、思想を注入し、相互に継続、統一することで継続性を持たせ、一体化し、安定的発展を目指したものと見えよう。

四 三民主義青年團の役割と第一次全国代表大会

一九四二年二月「三民主義青年團団員行動指導綱要」では、「奸党国賊の肃清励行」を全面に打ち出した。①公然と国家に背き民族を売った「漢奸・国賊」に、我々は随時手段を設けて削除する外、国内の「奸党分子」で三民主義と「国家至上、民族至上」の原則に

反する一切の言動を、民衆を喚起することで、徹底的に肃清する。②団員は、敵後、戦区で「奸党」が統一を破壊し、抗戦を破壊する事実を発見したならば、ためらわずこれと闘争し、並びに民衆を動員し、直接制裁を加える。③団員は、学校内で「奸党」が同級生を幻惑する事実を発見したならば、学生団体の意志と力量で痛撃を加え、必要時には学校当局に報告し、制裁を加える。ただし、その思想が幼稚で付和雷同している者に対しては、主義と国策に基づき、説得、感化する。④団員は一般社会の青年の中で「奸党」が撒布する各種デマに注意し、反駁する。その他、積極的に基層政治建設工作に参加するとし、団員は随時、政府法令を擁護し、社会世論を指導し、「奸党」が民主政治、及び言論・出版・集会・結社の自由のスローガンを口実に、国家の軍令統一や政令統一を破壊する時は、公然と反駁し、並びに民衆と結びつき制裁を加える。⁽³⁵⁾この「漢奸」は日本軍協力者など、「国賊」は汪精衛とその一派を指し、これへの警戒していた。それと同時に「奸党」が「民主政治、及び言論・出版・集会・結社の自由を口実に」としていることから、「奸党」は中共系と第三勢力系の青年運動、特に中共系のそれを指している。と見なせよう。これらに強い警戒心を持っていたことが読みとれる。民衆を巻き込み打撃を加え、かつ学校内でも警戒し、それに打撃を加え、思想堅固でない者は吸収しようとしている。

ところで、三青团第一次全国代表大会の開催は遅く、四三年四月のことであった。全国的な体勢を固めに時間を要したということだろう。その「宣言」を要約すると、以下の通り。

我々は中華民族、三民主義の青年である。中華民族が（日本軍の）空前の襲撃に遭って、前線將兵は苦戦し、陥落区の父老兄弟が受難しながら奮闘している。青年が空前の責任を負わねばならない時、革命先烈記念日に第一次全国代表大会が重慶で開催された。

歴史の車輪が最終的には必ず光明に向かうと信じている。まさに我々の世代は全民族の力を用いて敵と生存を争わなくてはならず、また「次殖民地」の産業落後の国家を、独立自由・富強安樂の現代国家にしなければならぬ。我々は科学上に真理の基礎があると信じる。科学的方法に基づき、人・事・時・地・物の各種の客觀的條件を分析する。困窮、擾亂し、調和を失った社会を改造して三民主義の富強安樂な国家を形成する。我々の信念は、三民主義は国家のために「大忠」を尽くし、民族のために「大孝」を尽くし、世界人類のために「大仁大愛」を尽くす。

我々の責任は極めて大きく、前途ははるかに遠く、事業は艱難を極める。だが、我々には領袖（蔣介石）がおり、主義がある。ただ終始一貫、実践、努力すれば、自ずと一点一滴が集まり、長江の大河となる。团长（蔣介石）の著作『中国之命運』の目的は、五千年

の民族歴史・文化の中から我々民族の特質を認識し、百年来の悲痛、恥辱な史跡と五十年來の革命奮闘の歴史から民族の前途を理解させ、さらに全世界の変化・動揺から我が民族の地位と責任を明確にした。その中で最も主要な一節は、全国の同胞、とりわけ全青年は真つ直ぐに突き進み、共同努力し、国防・経済・文化の三位一体の新国家を建設することである。我々は生産落後の現状において、一方で国父（孫文）の「実業計画」に基づいて躍進し、現代化した工業国家とし、他方で、民生主義を導き手として資本主義の覆轍を免れる。

民族の光榮な歴史と革命の光榮な歴史を繼承し、先烈の遺業を发扬し、未来の光明を切り開く。ただし現在と従前とは全く異なる。当面の民族戦争は個人の闘争ではなく、全民の闘争である。もし才を待み英雄思想に踏み入れれば、国家進展の障害となる。したがって、今日の青年は病態生活に耽溺せず、愛国熱情を発揚し、革命の意義を認識し、革命的な人生觀を確立し、規則的で鍛錬する生活を過ごして意義ある事業に貢献する。团长は全国青年に「青年団は国家大動脈の中の新たな血流であり、中国の青年は入団の権利があり、また入団の義務がある」と呼びかけた。民衆は散砂、青年はセメント、国家は大きな家の如きものである。我々は民間に深く入り、全国同胞を強固な基石に凝結させ、民族生命を支え、大きな家とする。

代表大会では、中国の命運は我々青年の命運ということが示された。我々は自ら勉勵するのみならず、全国の青年に呼びかける。一致して奮起し、熱情を氣力に変え、孤立を團結に変え、我々と手を携えて奮闘せよ。「領袖の主義を貫徹し、神聖な抗戦勝利を勝ち取り、革命建国の大業を完成せよ。我々の主義と時代の使命を完成させよ」⁽³⁶⁾、と。このように、孫文や蔣介石の言を引用しながら、戦時期、および未来における青年の役割を強調し、青年に参加、團結、行動を呼びかけた。ただし反共という言葉を使用せず中共系青年に対して批判もしないが、三民主義を梃子に彼らを積極的に糾合しようとする表現もない。

こうした状況を見越して中共系の延安各界青年は、あえて團長蔣介石氣付けで三青团第一次全国代表大会全代表と全団員に対して次のような書簡を寄せた。

「延安各界青年は黄花崗烈士記念日に盛大な大会を開催した。参会の青年は一致して先烈の犠牲奮闘の精神を発揚する決心をした。そして、戦争、生産、学習の任務を実行し、全国青年を團結させ、日本帝国主義に打ち勝つために努力する」。「我国抗戦はすでに六年。全世界反侵略国家の中で抗戦は最も早く、最も長い。これは我が民族にとって光榮なことである。……英・ソ・米各国はすでに全面的、あるいは局部的な反攻を發動しており、ある面ではすでに驚異

的な成果をあげている。こうした形勢下で我国はいかに敵（日本）の新たな進攻という陰謀を粉碎し、迅速に反攻準備をし、世界戦争の発展に追いつくことは全国人民、とりわけ全国青年の重要な責任である」。したがって、「中国の異なる思想の青年が『抗日共同綱領』の下、團結しなければならぬ。我々は終始貴団（三青团）が青年を育み、抗戦、團結、青年自身を有利にすることを基準とすることを望む。我々は三青团と祖国生存の奮闘中、親密に手を携えるべきで、今、三民主義（を信奉する）青年と共產主義の青年と協力できないということとは不可解である」⁽³⁷⁾、と。このように、国民党・三青团が当初、中共系青年を参加させ、連繫するとしながらも実態として排斥していることに疑問を呈し、團結することを求めた。この書簡が実際に三青团第一次全国代表大会などで読みあげられた可能性は低いが、中共系青年が揺さぶりをかけようとしたと見て間違いない。ここでの最大の相違は、全国青年を一つにまとめ上げようとするのと、同じ目的に向かって複数の青年団体が協力することを認めるかであった。

第一次全国代表大会の開催後、中央団部は蔣介石の「新时期・新任務・新幹部」の指示に基づき、中央政治学校の先例に基づき、青年幹部班を中央青年幹部学校（以下、青年幹部学校）に拡充することにした。蔣介石が校長を兼任し、三青团幹部の養成訓練の専門機

構とし、中央団部が直接指導した。青年幹部学校の準備時期、依然として張治中、康澤が責任者であった。康澤は旧復興社構成員から一グループの者を選抜したが、留仏学生で四川省立教育学院教授の張国維を教務責任者とし、留独学生で中央軍事学校特別訓練班政治部少将主任の張一清を訓導責任者とした。また、青年幹部班第一期修了者を招聘し、三青团組織をコントロールしようとした。⁽³⁸⁾

三青团第一次全国代表大会の時、団員代表の四〇〇人余の中で青年幹部班卒が五〇人である。康澤が大会秘書長であり、三青团を統制するため、青年幹部班同学会の設置を発起した。四月初頭、中央団部講堂で同学会成立大会を挙行し、二〇〇人弱が参加した。中央団部派遣の康澤が指導し、代表大会運営は同窓の陳開国が主宰した。そこで、陳開国は同学会成立の意義として感情を密にして学行を研鑽し、団務事業の発展を促進する、と述べた。また、康澤は、三青团を「全国革命青年第三次團結」の中核と位置づけ、青年幹部班同学会の成立後、団長の指導下で「誠意をもって團結し、歴史が賦与した使命を完成させよう」と強調した。さらに、康澤は同学会の具体的な工作として中央団部と各地同学の間を疎通する架け橋の役割を果たすことを望むとした。⁽³⁹⁾

ここで三青团と新生活運動との関係に論及したい。新生活運動總會黃総幹事は各地の三青团書記兼同各地の新生活運動會の書記に要

請し、各地の三青团は各該地新生活運動會への参加を要請した。その理由として、すでに三青团各級団部は新生活運動の工作を兼ねており、三青团の業務に大きな支障はない。したがって、新生活運動の工作を推進するため、三青团（中央幹事會）は新生活運動總會と相談の上、以下の四点を決めたという。

①本團（三青团）各級団部書記は各該地の新生活運動書記を兼任する。団部各組・科・課は業務の性質により新生活運動の各課工作を兼任する。

②本團自身の業務に影響を及ぼさないために、各地の新生活運動促進會と各地団部は「合署弁公」（両者の關係部門が一緒におこなう）を原則とする。

③中央団部と新生活運動促進會は恒に密接に連繫する。

④團長（蔣介石）は新生活運動工作も兼任しているという状況下で、關係する党政軍各機關にそれぞれ命令、通知することを円滑にできる。⁽⁴⁰⁾ いわば三青团と新生活運動を組織的、もしくは行動的に結びつけ、連繫させ、新生活運動の基盤を整えようとした。換言すれば、抗戦期の新生活運動が充分に機能していないとの認識の下、三青团の力を借りて活力を与えようとしたのである。

ここで看過できないのが、やはり「漢奸・国賊」、「奸党」の摘発であろう。国民党統治地域全体で展開しようとしていたと推測され

る。例えば、福建省は台湾の対岸のため、特に厳しいと考えられるが、当地の三青团による「海澄分団処肅奸隊組織及工作綱要」によると、民国三四（一九四五）年度に（国民政府が）發布された「肅奸工作指導要点」を参照にして作成されたとあり、肅奸隊の任務は以下の通り。①「漢奸」に対する闘争に重点を置く。②当地に潜伏する各機関各地区の「漢奸分子」の活動情況、組織概況、及び本団に対する陰謀などを偵察する。③「漢奸」、及び「土匪」の活動情況を偵察する。④「漢奸」の証拠を搜索する。⑤「貪官汚吏」、土豪劣紳、及びその他の「悪勢力」の違法活動情況を偵察する。こうした偵察活動後、本隊隊員が「漢奸分子」たる確たる証拠を得た場合、その性質、軽重に分け、随時本隊に報告、打電し、指示を受け、並びに当地の軍警機関と共同で監視する。緊急時には軍警機関と情況を酌量し、逮捕、即刻梟に送り処理する。⁴¹

このように、日本敗戦前後、三青团の活動はむしろ日本軍そのものよりも、社会混乱の中で汪精衛派などの「国賊」、「漢奸」のあぶり出し、偵察・調査、検挙、処罰、及び肅清などにウエートが移っていた。多くの冤罪事件が発生した可能性は否定できない。「貪官汚吏」、土豪劣紳、及びその他の「悪勢力」の違法活動などを摘発、社会不安の除去に努めていた。

五 三民主義青年団と華僑

ここで注目すべきは、三青团が中国内にとどまらず、海外に進出していたことであろう。すなわち、「海外」とは華僑対象であり、慰問と同時に、団部の基礎を樹立しようとしたのである。こうして、一九四〇年一月に三青团は海外団部設立を開始した。まず南洋中心にマラヤ、「蘭印」、ビルマ、シヤム、ベトナム、及び香港、マカオなどに直属区団部を組織し、あるいは団務籌備委員を置いた。続いてアメリカでは米東、米中、米西に三直属区団部、カナダに団務籌備員、その他の重要地区に通訊員を置いた。カナダ、キューバ、メキシコなどにそれぞれ直属区団、直属区隊を成立させ、同時に団務籌備員、通訊員を置いた。この他、オーストラリア、ホノルル、ニュージーランドなどにも分団を成立させ、あるいは通訊員を派遣した。こうして組織化は順調に見えたが、太平洋戦争の勃発後、日本軍の南進により南洋各地が相継いで陥落した。この結果、南洋の団部は多くが日本占領区域内にあり、連絡、指導が困難に陥り、多数の団員は潜伏した。そこで、広州湾付近に直属区団部、ベトナム国境に団務籌備員を置き、海外団務を継続して推進する拠点、連絡の中枢とした。他方、日本の影響を直接受けないアメリカ、カナダでは三青团・隊はすでに普遍的に設立されている。四二年一二月段階で海

外区団一三、「分団一二」、区隊二三、分隊八四で、海外団員は一九〇〇余人とされる。⁽⁴⁾

表3によれば、支団はまだ組織されず、直属区団が一二〜一三で、直属区隊が太平洋戦争後の四二年に四から二三に飛躍的に増大、直属団務籌備員が四四年に八人となっている。主にアメリカなどを中心に伸びていると考えられるが、太平洋戦争勃発を契機に伸び、その後は概して伸びず、地域的拡大はあまりないが、安定していたと見なせるかもしれない。

ここで、華僑の出身地で、台湾の対岸にある福建省の事例を見ておきたい。四四年一月に発布された「三民主義青年団福州分団華僑青年戦地服務隊組織簡則」によれば、福州分団は優秀な帰国華僑青

表3 三青团海外団・隊統計表 (1940-1944)

年	支団	直属区団	直属分団	直属区隊	直属団務籌備員	通訊員
1940		12			2	8
1941		12	1	4	2	14
1942		12	2	23	3	14
1943		12	2	27	3	14
1944		13	2	20	8	15

出典：『革命文献—抗戦時期之青年運動』第63輯、6頁。なお、1944年の2個区隊は中央直属であるが、その他の18個区隊は各区団所屬。ただし本表では42年「直属分団2」となっているが、『三民主義青年団中央団部工作報告』一九四三年によれば、同年12月段階で「分団12」となっている。調査時期が異なるのであろうか。

年を戦地工作に従事させるよう計画、並びに『抗戦建国綱領』の帰国華僑服務規定に則り、各自の技能に基づき特殊訓練を施し、祖国防衛の華僑青年戦地服務隊を組織した。

【隊の構成】暫時六分隊とし、各分隊は一五人。

【隊員の条件】隊員二人の紹介で入隊表を提出、審査合格後、さらに正式に宣誓し、入隊する。①中華民國国民で一八歳以上、三〇歳以下の海外居住経験のある優秀な青年、②三民主義に明確な認識と堅固な信念を有し、品行方正、心身健康で（アヘン吸飲などの）不良嗜好のない者、③熱心に社会事業に志願、服務工作に参加、命令に服従し、団体規律を遵守する者である。

【本隊の工作範圍】

(一) 戦時服務：①遊撃、②陥落区物資の緊急運搬、③軍隊の通信・偵察・破壊などへの協力、④傷病軍民の救護、⑤前線軍隊の慰問など。

(二) 一般服務：①漢奸検挙、②環境衛生と不良風紀の是正、③帰国華僑の指導とその生産事業の開始、④失業・失学華僑に職業、進学を紹介、⑤管轄区域の帰国華僑人数、状況を調査、⑥政府による難民華僑救済に協力、⑦「代筆問字」処の設立、⑧節約儲蓄隊の組織化、⑨各所の華僑家族の慰撫と生産指導、⑩華僑青年体育隊の組織化、⑪華僑青年による巡回劇宣伝隊の組織化、⑫合作社の組織

化、⑬就学する力のない華僑児童小学部の新設などである。なお、経費は自ら調達し、分団部に報告して公簿に記録する。^⑭

上記の(1)を見ればわかる通り、物資の緊急運搬、慰問はもちろん、遊撃戦参加、特務工作なども帰国華僑青年の任務とされていることが理解できよう。ただし、それらが実際にどこまで実施されたのかを示す直接的史料は入手していない。(2)は漢奸檢挙、環境衛生から巡回劇宣伝隊、合作社の組織化、華僑児童小学部の新設など広範囲にわたり、帰国華僑の社会・経済・教育など全般への支援であった。

その上、福建省の三青团は「先烈の革命精神を発揚し、青年の抗戦情緒」を鼓舞するため、中央青年劇社に命じ、重慶の青年館で四五年三月二九日から革命歴史劇『黄花崗四十日』を公演した。連日観衆が多数集まり、各方面でも好評であった。なお、国民政府文官処「各機関学校団体集体參觀優待弁法」(四月一七日)は各機関、学校、団体の集団による観劇券は原価の「二割五分引き」にするという。^⑮ここから理解できることは、劇の上演を民衆啓蒙運動の一環として積極的に活用していたことであろう。また、黄花崗事件は前述した通り中共も高く評価しており、国共両党を結びつける梃子となる可能性はあったが、結実しなかつたと見なせる。

ここで華僑と共に採りあげられることの多い少数民族地域にも触

れておくと、三九年八月二六日に三青团中央団部が四川支団の樂山分団部籌備処に対して、民衆団体、特に「蒙古同胞」に送付するた^⑯め、蒙蔵委員会と連絡をとることを要請している。いわゆる少数民族と三青团の関係は入手した各史料では不明である。当然のことながら三青团が少数民族を組み込もうとしたが、孫文の三民主義を重要な柱とする三青团に少数民族が違和感を示したことは容易に推測される。どの程度の人数が実際に三青团に参加したのか、その実態解明は重要であろう。今後、できれば追究したい。

六 従軍、青年幹部班、青年幹部学校

一九四四年一月蔣介石は従軍学生に対して、日本の高田野砲兵連隊での一年間の自らの体験を回顧した後、以下のように訓示した。
①政府の法令に絶対服従し、軍隊の規律を厳守し、上官の命令を執行する。
②政治訓練を重視し、「中心信仰(信念)」を確立する。すなわち、三民主義のために奮闘し、立志従軍し、革命建国の大業を完成させる。
③人生、日常の必要とする一種の技能の学習に努め、国家を建設し、社会を改造するための中堅幹部を養成する。^⑰すなわち、絶対服従、三民主義、中堅幹部養成などを骨子とするというものであった。

国民党は軍事学校や訓練班で青年を訓練する外にも、大量の青年

を募集して兵力を拡充しようとした。だが、知識青年は兵になるとを望まない傾向があったため、依然として壮丁の徴発によって兵源を補充しようとした。日本軍は大陸打通作戦を發動し、四四年三月日本軍は河南、次いで湖南を攻撃し、一二月には、貴州省の独山を攻撃した。僅か八ヵ月間で国民党は兵力五、六〇万人の失い、大小都市一四六（居留民六〇〇万人）が陥落した。だが、蒋介石はむしろ知識青年を軍隊に引き入れる好機と見なし、三青团と政府機関を通して青年の従軍を發動した。⁽⁴⁷⁾

かくして、四四年九月には、蒋介石は「十万の青年、十万の軍」のスローガンを提起し、「国軍（国民政府軍）の素質を高め、反攻力量を充実させ、最後の勝利を勝ち取ろう」を名目に抗日と同時に反共軍事力も高めようとし、国民党中央党部と三青团中央団部に知識青年「一〇万人」を徴集し、従軍させる命令を出した。実は康澤はすでに四〇年冬に軍事委員会別働総隊を蒋介石の「近衛軍」に編制することを企図していたが、実現していなかった。康澤は、蒋介石命令で機は熟したと考え、奔走し始めた。四四年一〇月一四日全国知識青年志願従軍指導委員会が成立し、蒋介石が何応欽、呉鉄城、白崇禧、陳果夫、陳立夫、康澤、徐思平（兵役部次長）の七人を常務委員に指名した。なお、康澤は主任秘書である。かくして、一〇月二一〜二四日に知識青年従軍会議が重慶で開催され、国民党中央

執行監察委員、三青团中央幹部・監察など圧倒的多数の人員が参加した。⁽⁴⁸⁾

とはいえ、例えば、四川省軍区でも中将参謀徐思平が省内の学生の従軍を募集したが、応じたのは少数だけであった。四四年冬、重慶などでインド遠征軍を募集し、自動車部隊二個旅団を編制し、「中国青年遠征軍」と称した。同年末、国民党による知識青年の従軍を強化するため、三青团中央団部書記長胡庶華が自ら湖南に向いた結果、多くの青年が登録した。湖北省を始め、各省でも国民党、三青团各責任者が鼓舞した。それと同時に、三青团骨幹分子が従軍に登録し、模範となるように指示を出した。ただし無頼をも含む各種各様の青年が「抗日」宣伝により従軍したとされる。⁽⁴⁹⁾ こうして、問題も多かったが、青年の従軍に三青团は一定程度以上の役割を果たしたといえよう。

ところで、当時、三青团幹部養成はどのように展開したのであるか。四四年一月中旬、国民党中枢の人事がおこなわれ、陳立夫が中央組織部長、朱家驊が教育部長、王世傑が中央宣伝部長、張厲生が内政部長、および陳誠が何応欽に代わって軍政部長にそれぞれ就任した。かくして、陳誠嫡系の羅卓英が全国知識青年従軍編制訓練總監、蔣経国が青年軍政治部主任に任命された。蒋介石は贛州から行政督察専門員の蔣経国を呼び寄せ、青年幹部学校教育長に任命、

康澤への権力集中を押さえた。これにより蔣介石の力を利用して自らの地位を高めようとした康澤の望みは断たれた。蔣経国が重慶に到着すると、青年幹部学校の各部署を自らの配下の者で固めた。蔣経国は戴伝賢、任託宣、張一清らに「国父遺教」や「総裁言行」などの講義をさせた。なお、青年幹部学校に研究部と専修部を設け、思想強化を図った。⁵⁰⁾

結局、青年幹部班は計五期の修了者計二〇〇〇人余のほとんどが各種、各レベルの団務活動に従事した。例えば、中央団部各処、会室で仕事に従事する者が約五〇〇人、重慶支部、および所属分団が一〇〇人余で、その他も各省、市、県、陥落区、および海外団部で仕事をした。

国民政府軍の政治工作は長期間、賀衷寒を頭とする政治工作系統が握っていた。青年軍創設の時、蔣介石は蔣経国の新たな政治工作系統を新設しようとした。当時、蔣経国が三青团中央幹部教育長、青年軍政治工作班主任であり、従軍者の中から訓練を受ける人員を選抜した。

(一) 蘭州では、従軍政治工作員として選抜されたのは、李中舒、施応霆（国民党西北訓練団職員）、劉志誥（三青团幹部、西北師範学院学生）、及び三青团甘肅支団の下層機構の中堅分子である。李中舒らは飛行機で重慶到着後、まず三青团中央団部で組織処長の

康澤の点呼を受けた。こうして、従軍は三青团の団務工作の継続としての色彩を帯びた。

(二) 青年軍政治工作班は三青团中央幹部学校に設立されたが、これは国民党中央訓練団の所在地にあった。「青年軍は革命軍の武装学校」とのスローガンが掲げられた。

(三) 四五年春、青年軍政治部が成立し、蔣経国が主任となった。青年軍政治部は軍事委員会政治部（部長は張治中）に所属し、蔣経国が実質的に青年軍政治部と同各師団政治部の人事権を掌握した。第二〇一〜二〇八各師の師長は国民政府軍の師長クラスの政治部主任であり、軍校、あるいは軍校政治訓練班の出身者が多く、青年軍の師政治部主任は青年軍政治工作班の訓練工作に参加した経験を持っていた。

(四) 青年軍政治工作班と青年軍政治部の成立にしたがい、蔣経国派の勢力が拡大した。元来、いわゆる蔣経国派は主に三部分から構成された。①蔣経国のソ連留学時代の同学である「トロツキ派」、②いわゆる「贛南派」、③三青团幹部学校派である。そして、また青年軍政治工作班の教職員と学生である。蔣経国派は「藍衣社」、「C・C団」と異なり、三青团中央幹部学校交友会を梃子に連携した。とはいえ、蔣経国も旧復興社系を無視できず、青年幹部学校、青年軍を実質的に支配下に置いた後、四五年春には、康澤を除く旧復興

社構成員との関係を強化した。例えば、旧復興社中堅の劉健群を中央団部副書記長などに任命し、他方、康澤を欧州視察を名目に中国から引き離し^①、三青团への影響力を最終的に失わせた。とはいえ、康澤は失脚したわけではなく、国共内戦期には、国民政府軍第一五綏靖区中将司令官などを歴任している。

結局のところ同学会は四三年夏から四六年秋までの主要工作は①各期同学の登録、②同学内の工作不適者の指摘、調整、③その他工作を担当する同学の推薦、④不定期刊行物『青年通訊』を刊行し、中央団部の関連指示の伝達、同学動態を掲載、また同学の連携強化などを呼びかけた。陳開国によれば、蔣経国は「C・C団」と復興社の矛盾、並びに復興社内部の対立を利用して、康澤を排除し、幹部要請訓練機構として、新たに青年幹部学校と青年軍の指導権を奪取することにした。かくして、対日抗戦勝利を受けて蔣経国主導で、青年幹部学校交友会が設立され^②、国共内戦期に突入していくことになる。

おわりに

以上のことから以下のようにいえよう。

第一に、三青团は形式的にも中共系を包括する統一戦線組織として成立した。その背景には、一九三七年の盧溝橋事件以前から、中

共、第三勢力系の青年組織に比して国民党系青年組織が圧倒的に弱体であったという事情があり、是が非でも国民党下に強力な統一した青年団体の組織化を目指す蔣介石の意思、及び国民党内の各派閥の論理が働いたといえよう。こうして、三青团は蔣介石を頂点としながらも国民党内の各派閥の綱引きによって決定された。陳立夫は国民党内の青年組織とすることを考えていたが、それは否定され、むしろ「C・C団」は一定の基盤を有しつつも、旧復興社・「藍衣社」系統の色彩の強い団体となった。

第二に、三青团の宗旨が三民主義の実行に極力努力し、「国家防衛」、「民族復興」にあり、青年の「革命的人格」を「忠孝、孝順、仁愛、信義」など儒教的理念に求めるという復古的なものでありながらも、旧復興社系・「藍衣社」の「反共抗日」の「抗日」側面が全面に押し出された。この結果、三青团は武漢抗戦では本格的に日本軍と戦い、多方面での活動を積極的におこない、多くの犠牲者を出しながらも、多方面で意義を残した。のみならず、武漢戦後もある部分の青年団員は前線、戦地、陥落地区で民衆組織化に着手する一方、情報戦や破壊活動を継続した。ここで、押さえるべきことは、武漢残留三青团員が日本軍のみならず、対日情報戦において「C・C団」、「藍衣社」とも軋轢があったとの指摘であろう。換言すれば、康澤の指導とも関連すると見なせるが、三青团は単独行動をとるこ

とも少なくなかったことを示唆する。

第三、三青团は重慶では対日抗戦を直接戦うことはほとんどなくなり、反共的姿勢を鮮明にした。中共系や第三勢力系の青年のある部分を吸収しながら、全体としては中共系排斥という構図となった。四三年四月、三青团第一次全国代表大会に対して、抗日戦争に対して延安の中共系青年からの協力呼びかけもあつたが、国民党は三青团への青年の全国的な統一を目指しており、別組織としての協力関係は拒絶した。地方諸都市への三青团浸透による青年運動の国民党の側面はあつたが、農村にはほとんど浸透していない。抗戦後期から末期においては、日本軍それ自体よりも「漢奸・国賊」（日本軍協力者と汪精衛派）と「奸党」（中共）の追及、監視、捕縛などに関しては三青团は積極的に参加した。

第四に、三青团は他青年団との協力を望まず、中国で唯一の青年団になることを目指していたことは繰り返し述べてきた。とはいえ、国民党が指導する運動、特に宋美齡が積極的に推進する新生活運動との連繋、支援協力は明白である。むしろ指導、参画し、基層レベルで一体化する傾向すらあつた。このことは何を意味するのか。軍事・情報戦などを除く、国民党系運動などには積極的に取り組む姿勢を見せる。また、三青团の組織機構の強化、安定化を目指す幼童軍、童子軍、少年団の組織化、育成は学校教育とも関連するため、教育

長、教育局との分担・協力関係が不可欠だったといえよう。

第五に、康澤は三青团創設時期の論敵「C・C団」のみならず、最終的には自らの出身母体の旧復興社・「藍衣社」からも浮く存在となつてしまった。国民党内各派閥の均衡の上に独裁体制を形成しようとする蒋介石に対して、蔣の意を慮りながらも、例えば三青团を蔣直属にしようとする康澤の行動は蔣にとつても重荷となつていった。したがって、蔣経国などによる独断専行の康澤排斥する動きが強まる必然性があつたといえよう。

最後に三青团と華僑との関係について触れておきたい。南洋と異なり、アメリカ、カナダ、オーストラリアなど、日本軍の直接占領を受けていない諸国家には三青团は組織化に成功したように見える。ただし拙著『戦争と華僑統編—中国国民政府・汪精衛政権の華僑行政と南米・北米』（汲古書院、二〇一八年）で明らかにしたように、国民政府僑務委員会、海外部、大使館、総領事館、領事館の下で、華僑青年にアプローチしたと考えられ、独自の具体的な動きに関しては判然としない。本稿で明らかにしたように、むしろ福建、広東両省などでの帰国華僑問題に積極的に取り組み、協力したと見なせよう。

【注】

- (1) 関連拙稿としては、①「都市型特務『C・C』系の『反共抗日』路線について―その生成から抗日戦争における意義と限界(上)(下)、『近きに在りて』第三五号、汲古書院、一九九九年六月、三〇二頁。同三六号、同二月。②「中国特務『藍衣社』の抗日活動とその特質―日中戦争の一断面」、大阪歴史科学協議会『歴史科学』第一八一号、二〇〇五年八月(中文訳：施愛軍訳「中国特務『藍衣社』の抗日活動及其特質」、『新世紀学刊』(ヘンガポール)第六期、二〇〇六年二月。その他、インタビューとしては、③「陳立夫氏へのインタビュー―三民主義青年団、『C・C』の呼称、及び日本人への提言」、『中国研究月報』第五九二号、一九九七年六月(鑑崗訳「陳立夫談三青团」、『C・C』)、中国社会科学院近代史研究所『近代史資料』総九七号、一九九九年八月)があり、一般向けとしては、④「政治テロの横行―藍衣社・CC団・三民主義青年団」、野口鐵郎編『結社の世界史―結社が描く中国近代』第二巻、山川出版社、二〇〇五年がある。
- (2) 「三民主義青年団の性格と任務」、『東亞』第一四卷五号、一九四一年五月。
- (3) 康澤「三民主義青年団成立の経過」、『文史資料選輯』第四〇輯、一九六三年。略歴を見ると、康澤(1904-1967)は四川省安岳出身。黄埔軍官学校第三期卒、国民党内で特務工作与青年工作に従事。その後、復興社中央幹事兼宣伝処長、三青团中央臨時幹事会幹事、同組織処処長、及び国民党執行委員などを歴任。国共内戦期の一四四七年末、国民政府軍第一五綏靖区中将司令官であったが、四八年七月襄樊戦役で中共軍に捕縛され、戦犯管理所に収監された。六三年特赦により放免

され、全国政治協商會議文史資料研究委員會専門員(『中国近現代人名大辞典』中国国際広播出版社、一九八九年、六四二頁参照)。

- (4) 中華復興社参加の経験を持つ陳敦正によれば、復興社の核心組織は三民主義力行社で、力行社の骨幹は革命青年同志会と革命軍人同志会であったとする。復興社設立以前に、劉健群はイタリアのファシズム運動に倣い、一つの「新組織」を成立させ、同時に「イタリア黒シャツ党」のように幹部が藍色の制服を着用することを主張した。かくして、「藍衣社」という名称が流布した。劉健群は復興社の重要幹部となったが、その提案は復興社内では却下され、いかなる幹部も工作員も藍色の制服を着た事実はない(干国勳等『藍衣社 復興社 力行社』伝記文学出版社、一九八四年、五七〇五八頁)、とする。つまり、前述した四組織は並列関係にあるのではなく、結果的に復興社が三組織を包括する大組織であった。そして復興社の通称が「藍衣社」となり、一般的には「藍衣社」という名称が流布したことになる。ただ、これら四組織の相互関係は不明な点が残り、さらに追究する必要がある。
- (5) 康澤、同前回憶「三民主義青年団成立の経過」。
- (6) 劉麗慧「抗戦時期中国国民党政関係調整之研究」、『復興崗学報』第八四期、二〇〇五年。
- (7) 前掲拙稿「陳立夫氏へのインタビュー」。
- (8) 陳開国「青幹班和青幹校始末記」、『文史資料選輯』第七四輯、(合訂本)一九八六年。なお、陳開国は一九三八年武漢で国民党中央訓練委員会指導処で働いていた。八月三青团中央団部により指名され、武昌にある中央訓練団青年幹部訓練班で第一期生として訓練を受け、一〇月に修了。四一年夏、青年幹部訓練班第二期が重慶で始まると、三

- 青団重慶支団書記から同訓練班の訓練育成幹事に異動。九月糧食部督導副主任、青年幹部訓練班の第三〇五期の指導員を兼任。四四年青年幹部訓練班は青年幹部学校に改称。三青团中央候補幹事、また青年幹部訓練班同学会、次いで青年幹部学校交友会の常務理事を兼任した。
- また、桂永清は江西省出身で、黄埔軍官学校一期生。蒋介石の命を受けてドイツ、イタリアに行き、ヒトラー、ムッソリーニのファッシスト組織とその活動を視察。一九三二年春、復興社成立。蒋介石は桂永清を復興社内有力社構成員とし、訓練処長を兼任させた。抗戦前夜、桂永清は軍事委員会教導総隊隊長。桂は武漢で軍事委員会戦時幹部訓練団の教育長であった時、陳誠の寵愛を受け、かつ復興社内部の支持を得た。そこで、青年幹部班の中將に当選した。
- (9) 「為組織三民主義青年団、蔣委員長告青年書、勉青年実行抗戦建国綱領、集優秀分子充実革命活力」、『新華日報』一九三八年六月一七日。
- (10) 前掲「三民主義青年団の性格と任務」。
- (11) 三民主義青年団中央団部編『三民主義青年団史資料第一輯初稿』上編(中国国民党中央党史委員会所蔵史料)、一九四六年八月、三〇四頁。
- (12) 「三民主義青年団団章」、『新華日報』一九三八年六月一八日。
- (13) 前掲「三民主義青年団史資料第一輯初稿」上編、二〇頁。なお、() は前掲「民国人物大事典」、国民党六届中委各派系名单』一九四五年九月、二〇五頁等々から考察。
- (14) 「三民主義青年団組織中央団部幹事会」、『新華日報』一九三八年八月二一日。
- (15) 「社論・抗議解散三団体—民族解放先鋒隊、青年救国団、蟻社」、『新華日報』一九三八年八月二一日。
- (16) 前掲「三民主義青年団の性格と任務」。
- (17) 「青年団武漢支団部発表告武漢青年書」、『新華日報』一九三八年九月一三日。
- (18) 陳開國、前掲回憶。
- (19) 『三民主義青年団戦地殉難工作志士簡略事跡表』年代不詳、党史委員会所蔵史料。陳復生等『三民主義青年団在武漢』青年出版社、一九三九年四月、三〇四、九、一六〇一八頁、同所蔵史料。前掲「三民主義青年団の性格と任務」など。
- (20) 陳開國、前掲回憶。
- (21) 陳開國、同前。
- (22) 前掲「三民主義青年団の性格と任務」。
- (23) 「三民主義青年団正式成立」、『中央日報』一九三九年九月二日。
- (24) 王良卿『三民主義青年団与中国国民党關係研究(1937-1949)』近代中国出版社(台北)一九九八年、一一六頁など。
- (25) 陳開國、前掲回憶。
- (26) 朱家驊(1893-1963)は、浙江省呉興出身。一九二二年ドイツ留學、地質学を学ぶ。二四年帰国、北京大学地質系教授。二九年国民党中央委員、その後、教育部長、交通部長、浙江省主席を歴任。三九年二月組織部長兼中央調査統計局(C・C団)局長となったが、陳果夫、陳立夫と対立、分裂して新「C・C団」派(朱家驊派)を形成。四〇〇五七年中央研究院代理院長。台湾で死去(中国近現代人名大辞典『中国国際広播出版社、一九八九年、一三六頁)。
- (27) 陳開國、前掲回憶。
- (28) 前掲「三民主義青年団の性格と任務」。ところが、日本側の『東亜』所収の本文が「張治中の反共」を全面に打ち出すのに対して、張治

中に対して「国民党内民主派」として全く異なる評価を与える必要があるのかもしれない。略歴を見ると、張治中(1890-1969)は安徽省巢県出身。一九二四年広州での国民党第一次全国代表大会で孫文の三大政策を擁護。黄埔軍官学校開設に参画、軍事研究委員会委員、周恩来、鄧演達とも親密で、左傾化して「紅色教官」と称された。二七年四・一二上海クーデターでは、「反共」も「反蔣」にも組みしなかった。二九、三〇年の中原大戦では、蒋介石側に立ち、馮玉祥、閻錫山と戦う。三一年第一次上海事変で第四路軍総指揮として日本軍と戦う。三六年西安事変の際、蔣救出と「和平解決」を主張。三七年盧溝橋事件後、第九集團軍總司令、第二次上海事変にも参戦。十一月湖南省主席、中共との関係は良好であった。二八年三月汚職摘発、八月中国工業合作協会理事。三九年二月軍事委員会委員長侍從室第一処主任に異動、各戦区との連絡担当。四〇年九月軍事委員会政治部部长、三青团中央幹事会書記長。また、政治部内に文化工作委員会を設置、郭沫若ら左派系文化人を配置。さらに多くの愛国青年を殺害していた四川省黨部の集中營を廃止。四二年重慶での国共交渉で国民党側代表。四三年「孔祥熙打倒運動」を發起、各地で三青团による倒孔運動が各地でおこなわれた。四五年五月国民党第六次全国代表大会で三青团代表を率いて「政治改革方案」を提出、①労働を国民党の基礎とすること、②民主集中制、「耕者有其田」を主張。四五年抗日戦争勝利後、国共両党の和平交渉を続け、重慶交渉ではハーレー、毛沢東と交渉し、「二十協定」調印にこぎ着けた。四九年九月人民政治協商会議全国委員などを歴任(①『張治中回憶録』上・下、文史資料出版社、一九八五年。②余湛邦『張治中』、『民国人物伝』第五卷、中華書局、一九八六年。③張治中『六十歳総括』、『文史資料選輯』第七〇輯などを参照)。このように、

相反する記述、評価があり、さらに実証的に考察する必要がある。

(29) 「社論：青年労働服務營」、『中央日報』一九四〇年九月七日。

(30) 陶百川「三民主義青年団的前途」、『中央日報』一九四一年七月十四日。なお、陶百川は一九〇三年に浙江省紹興で生まれる。ハーバート

大学大学院で政治・法律専攻。国民党上海市党部常務委員、淞滬警備

司令部軍法処処長を歴任。一九三八年第一回国民参政会参政員。三九

年三青团中央監察会監察、四一年三青团中央幹事会幹事などを歴任し

た(『民国人物大辞典』河北人民出版社、一九九一年、一〇八〇頁)。

(31) 「三民主義青年団茶会歓迎英議員」、『新華日報』一九四二年一月二

〇日。

(32) 福建省檔案局所蔵33-15-16『三青团福建省支部部一1939-1949』

所収、「三青团福建支団關於調查共產黨組織人事的材料」一九四一年。

(33) 国史館(台湾)所蔵、001090060003027-3032、陳立夫・張治中

「電送加強戰地失学失業青年招訓委員會与三民主義青年団工作連繫辦

法」一九四三年一月一日。

(34) 国史館所蔵001014410001014-1019、「統一全国青年組訓綱領案」

年月不詳。

(35) 「三民主義青年団団員行動指導綱要」一九四二年二月一三日、中国

国民党中央委員会党史委員会『革命文獻』抗戦時期之青年運動』第六

二輯、中央文物供应社、一九七三年、五六―五八頁。なお、これは四

一年六月一二日中央幹事会の指示に補充制定したものである。

(36) 「青年団全代会宣言」、『中央日報』一九四三年四月一三日。

(37) 国史館所蔵00208030041-011-001、延安各界青年↓三青团団長

蔣介石転交、三青团第一次全国代表大会全体代表・全体団員、一九四

三年。

- (38) 陳開国、前掲回憶。
- (39) 陳開国、同前。
- (40) 国史館001054001004046-4049、三民主義青年団中央幹事會書記張治中「為本團各地團部書記、可兼任各該地新運會書記、至对本團本身業務有無妨碍一節、現正与新運總會檢討中……」一九四三年一月二八日。
- (41) 福建省檔案局83-15-16『三青团福建省支團部—1929-1949』所収、「三青团海澄、詔安、漳州、長太分團辦理肅奸隊組織及工作綱要的命令、報告、代電」一九四五年(?)。
- (42) 『三民主義青年団中央団部工作報告』(台湾の党史委員會所藏檔案)一九四三年三月、一、一三、一七、一九頁。『革命文獻—抗戰時期之青年運動』第六三輯、五頁。
- (43) 福建省檔案局83-15-305『三青团福建省支團部—一九二九—一九四九』所収、「三青团福建支團幹事會關於青年服務工作人員任免補充辦法及福州市華僑青年戰地服務隊工作計畫、組織簡則」一九四四年一月一〇日。
- (44) 国史館001097400001005-1006、三民主義青年団中央幹事會「為中央青年劇社公演革命史劇『集体參觀優待辦法』……」一九四五年四月一七日。なお、黄花崗起義とは、周知の如く孫文が發動し、失敗に終わった一〇回目の起義であるが、黄興指導下で決死隊が英雄的に戦ったことで有名である。この後、辛亥革命の導火線である武昌起義が勃発した。一八九五年広州起義の失敗後、孫文、黄興、趙声が華僑代表と秘密會議を開催し、再び広州での起義を計画した。それぞれが革命資金を準備し、武器購入を決めた。一九一一年一月中国同盟会は香港に統一指揮部を準備し、黄興と趙声が正副部長に就いた。かくし
- て敢死隊員八〇〇人余を組織し、四月一三日に広州各要地に一〇方面から攻撃する計画であった。だが、購入した武器が日本から届かなかつた。そこで、計画の変更を余儀なくされ、結局、二七日に決行、黄興は敢死隊一〇〇人余を率いて両広總督衙門を攻撃したが、激戦の末、失敗。黄興は香港に逃亡、敢死隊員の犠牲も少なくなかつた。後に彼らの英雄的な戦いぶりが後に辛亥革命の勝利をもたらしたとし、広州城外の黄花崗に「七二烈士の碑」が建てられた(『民国大辞典』中国廣播電視出版社、一頁参照)。
- (45) 国史館001072470012045-1204、国民政府文官処↓三青团中央団部↓樂山分団部、一九三九年九月二日。
- (46) 「蔣委員長對從軍學生之訓詞」一九四四年一月一〇日、『革命文獻—抗戰時期之青年運動』第六二輯、一八五—一八七頁。
- (47) 李中舒「三青团和青年軍政工的合流」、中国人民政治協商會議全國委員會文史資料研究委員會編『文史資料選輯』第六九輯、中国文史出版社、(合訂本)一九八六年。なお、李中舒は一九四四年末、蘭州の甘肅省政府合作事業管理局の科長であった時、蔣介石が發動した青年從軍運動に参加した。この時、李は三青团団員でもあり、四三年西北技芸專科學校農業經濟科で教えていた時、同校の三青团分団部の常務監察を兼任した。
- (48) 陳開国、前掲回憶。
- (49) 李中舒、前掲回憶。
- (50) 陳開国、前掲回憶。
- (51) 陳開国、同前。李中舒、前掲回憶。
- (52) 陳開国、同前。

